



©Hikaru Hoshi

## 第194回定期演奏会

2023年1月13日(金) 17:45開場 18:45開演 [18:25～指揮者プレトークあり]

三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮(常任指揮者)

ワーグナー:「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より “第1幕への前奏曲”

ワーグナー:ジークフリート牧歌

ドヴォルザーク:交響詩「英雄の歌」

シベリウス:交響詩「タピオラ」

シューマン、チャイコフスキー、メンデルスゾーン……と隠れた絆で結ばれた3つの作品をお楽しみいただく本日のコンサートに続きまして、次回定期(年明けの1月13日)は、我らが常任指揮者・角田鋼亮の登場です。ワーグナーにドヴォルザーク、シベリウスと、19世紀後半のロマン派から20世紀はじめの独創的な詩情へ至る4作品、ヴァラエティ豊かなプログラムでお届けすることになります。

マエストロ角田の登場回ではおなじみですが、次回定期でもやはり、選曲には〈隠れたテーマ〉があるようです。神々・英雄・人間……高い理想を掲げてたかう誇り高きひとの姿から、壮大な自然の奥ふかくに響く神々の荘厳まで、4つの傑作がさまざまな〈力〉とその美しさを描きます。ちょっとご紹介してみましょ。

### ◆神々の棲む森へ——傑作《タピオラ》の幻想美

曲順では逆からお話させていただきますが……、次回定期の最後に演奏されるのは、北欧フィンランドの国民的大作曲家ジャン・シベリウス(1865～1957)の交響詩《タピオラ》(1926年初演)です。

不思議なタイトルからまずご紹介しますと、森と湖の国・フィンランドでは、森の神タピオの領地のことを〈タピオラ〉と呼ぶそう、この曲はいわば、フィンランドの象徴でもある、太古から神々のいます森への讃歌……とでも申しましょうか。総譜の冒頭には、こんな詩が掲げられています。やや意識になりますが——「北国の大地に、薄暗い森が広がっている/いにしえの神秘、陰鬱な太古の夢/そこには、大いなる森の神が住んでおられて/森の精たちは薄闇のなか、魔法の秘密を織っている」

そんな、深い森から生まれる神秘と幻想の世界を、見事なオーケストラ書法で描き響かせてみせたのが、交響詩《タピオラ》なのです。曲の冒頭、力強く奏される〈森のテーマ〉や、悠久の大地を思わせる動機、さらに〈森の神タピオのテーマ〉と、雰囲気たっぷりの音楽にもさまざまな主題が巧みに織り込まれ、美しい変容を響かせ……聴き手を深く抱き込んでゆく、素晴らしい作品です。

シベリウスは若い頃から、フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』(岩波文庫、講談社学術文庫などで日本語訳が読めます)に魅せられ、この本に溢れる森と神々の伝説からインスピレーションを受けて、数々の素晴らしい交響詩を書いていた。《タピオラ》は、シベリウスの『カレワラ』に基づく一連の作品でも、最後の名作となりました。

きわめて繊細で神秘的な表現から、轟きわたるエネルギーの迫力まで、詩情の起伏も見事な《タピオラ》——長くても18分ほどの作品ですが、その印象の濃さ、凄密度は交響曲なみ。この音世界こそはぜひ、生演奏で全身全霊を包まれる体験と共に味わっていただければ、感銘もひとしおかと思えます。

シベリウス研究の権威、神部智さんの著書『作曲家◎人と作品 シベリウス』[音楽之友社、2017年]では、「モノクロームな峻厳さが際立」ち「ストイックな音調」をもつこの《タピオラ》は、「編目のように張り巡らされた緻密な動機連関、楽想それ自体が永遠に自己生成していくような有機的変奏」など、「究極の心象風景と、彼の高度な作曲技法が見事に一致した稀有なる傑作」と評された上で、作曲の背景から作品の特徴まで、鋭い解説がされています。ぜひ一読を。

### ◆英雄の生きる姿を——ドヴォルザーク晩年の知られざる傑作

《タピオラ》は、シベリウス最後のオーケストラ作品となったのですが、次回定期でその前にお聴きいただく《英雄の歌》(1898年初演)も、チェコの国民的大作曲家アントニン・ドヴォルザーク(1841～1904)最後の交響詩でした。

ドヴォルザークが晩年、アメリカに招聘された折に望郷の想いをこめて書いた傑作・交響曲第9番《新世界より》(1893年初演)はよく知られていますが、この《英雄の歌》は、チェコ帰国後に手がけた一連の交響詩——《水の精》《真昼の魔女》《金の紡ぎ車》《野鳩》と、詩人エルベンのパラード(譚詩)による傑作たちに続いて書かれています。先行する4作が、故郷ボヘミアの詩情をたっぷり注いだ、元の詩に沿った音楽であるのに対して、こちらの《英雄の歌》には標題がありません。さて、英雄とは?

余談ながら、本作の1年後、20以上歳下のドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウスが、交響詩《英雄の生涯》という大編成オーケストラの作品を書いています。こちらは、ある英雄が人生で愛に恵まれ、敵と戦いながらも勝利を収め……という、シュトラウス自身の人生を反映した自伝的な大作になっています。

偶然ながら、ほぼ同時代に書かれたドヴォルザークの《英雄の歌》のほうも、組みたては《英雄の生涯》とちょっと似ています。——冒頭に登場する、力強いテーマ（覚えやすく耳に残るこの主題が、曲を通して現れるので、分かりやすく出来ているのです）は、力に満ちあふれた若き英雄の姿でしょうか。やがて英雄は打撃を受けて悲嘆にくれ、しかし柔らかい音楽が慰めと回復を描き、英雄は反撃し、勝利する……という過程が、音楽で雄弁に描かれてゆきます。

ところが、聴いてみると、リヒャルト・シュトラウスの《英雄の生涯》とは印象が真逆、と言いましょか。ほとんど関連性がない、と言い切ってもいいくらい似ていません。とても描写的なシュトラウス作品に対して、ドヴォルザークの《英雄の歌》は、もっと抽象的な……と申しましょか。英雄、というより〈高い理想を追究する芸術家〉の葛藤と昇華を、ドヴォルザークならではの色彩感（チェコ風の歌やリズムも溢れています）と共に、象徴的に描いているのです。

冒頭のテーマが変容するうちに、さまざまな感情をも表現してみたりと、晩年のドヴォルザークが熟練のペンで響かせる秀作……なぜか実演で触れる機会の少ない作品ですので（最近、海外では《新世界より》のCDに併せて収められる例も増えてきて、再評価が高まっています）、ぜひホールで体感を。

## ◆雄々しく生きるひと、その愛と強さを——ワーグナーの名作2題

次回定期の前半では、シベリウスが若き日にその楽劇に触れて衝撃を受け、ドヴォルザークもまた強い影響を受けた作曲家——ドイツの巨匠リヒャルト・ワーグナー（1813~1883）の音楽も味わっていただきます。

4夜にわたる連作となった巨大な代表作、楽劇《ニーベルングの指環》が、同時代から後世に与えたインパクトは絶大なものがありました。北欧神話やドイツの叙事詩・英雄伝説など多彩な源泉からワーグナー自身がインスピレーションを広げた、神々の壮大な物語です。この連作のうち、3作目にあたる《ジークフリート》という作品があります（1876年初演）。この大作を書いているあいだ、ワーグナーには妻コジマ（作曲家リストの娘）とのあいだに長男が生まれ、作曲中の楽劇で主人公となるヒーローの名にあやかって《ジークフリート》と名付けられました（後に成人後、彼も作曲家となります）。

家庭の幸せに恵まれたワーグナーは、長男誕生からしばらく経ったある年のクリスマス、愛妻コジマに（クリスマス生まれの彼女に、誕生日の贈り物を兼ねて）新曲をプレゼントすることを思いつきます。最小で13人いれば演奏できる、小編成オーケストラのための新作——鳥の歌や美しい日の出も描かれる、素敵な牧歌——を書いて、妻に内緒で友人たちを集めて練習したワーグナー。クリスマスの当日朝、まだ妻が眠っているワーグナー邸に演奏家たちを揃えて、いきなりこの新作を指揮したのです。

驚いたのは妻コジマ。眠っていたら、いきなり世にも美しいアンサンブルが響いてきたうえに、それが自分への贈り物だったというのですから、なんとも贅沢な話で……。

息子ジークフリートをもうけてくれた妻への感謝をこめた音楽——のちに完成する楽劇《ジークフリート》にも登場するさまざまな素材が、この曲でも聴こえてきますので、本作はのちのち《ジークフリート牧歌》と呼ばれるようになりました。

英雄の名を冠しながら、力強さよりは優しさを溢れさせたこの音楽は、ひとが愛し合い、新しい命が生まれ、育てられてゆくその喜びを、熟練の筆致で響かせた傑作です。雄々しく生きる英雄を支える愛と優しさ……次回定期でこの作品が選ばれているのも、ちゃんと繋がりがああるわけです。

さらに。次回定期の冒頭では、同じワーグナーの楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》（1868年初演）から、第1幕への前奏曲もお聴きいただきます。

ワーグナーには珍しい喜劇ですが、16世紀ドイツの都市ニュルンベルクを舞台に、街で詩と歌の腕を磨く親方たち——マイスタージンガー（職匠歌人）たちの歌合戦に挑む若い青年、彼と好意を寄せ合う娘エーファをめぐる恋模様も織り込んだ大作オペラです。民衆芸術への讃歌、ひいてはドイツ精神の昂揚……と、壮大なテーマも込められたこの傑作から、次回定期でお聴きいただく〈第1幕への前奏曲〉は、オペラ全体にあらわれる数多くの重要な動機が巧みに織り上げられ、全曲の見事な要約になっています。そこには、理想に向けて雄々しく立ち向かう（英雄的な）ひと、その愛と生きざまもまた力強く響くのです。

……と、演奏順とは逆にご紹介してみました。次回定期の〈隠れたテーマ〉、4曲の意外な繋がり、そこに響き描かれるさまざまな〈力〉の美しさ、も浮かび上がってくるのではないでしょか？ 詳細は当日の楽曲解説にお譲りするとして、ぜひホールで一緒に！

### やまの たけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタステイカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。

Profile

